

□海外文献紹介□

同一患者にみられた Crohn 病と  
潰瘍性大腸炎

Crohn's disease and ulcerative colitis in the same patient: *White III CL, Hamilton SR, Diamond MP, Cameron JL* (Gut 24: 857-862, 1983)

著者らは臨床的、病理学的データの十分整った Crohn 病と潰瘍性大腸炎の共存例を報告している。

患者: 29歳, 白人女性. 1968年, 痔瘻のため Johns Hopkins Hospital を受診. 注腸検査にて上行結腸の狭窄が認められ, 一期的に回腸結腸切除術および回腸結腸吻合術が施行された. 潰瘍を伴った狭窄が, 回盲弁の近位 6 cm, 遠位数 cm にみられ, 狭窄部と盲腸間の結腸粘膜は正常であった. 組織学的に全層性炎症,

fissuring ulceration, 結腸周囲軟部組織および所属リンパ節に非乾酪性肉芽腫を認め, Crohn 病と診断された. 術後 1 年 1 カ月に肛門出血があり, S 状結腸ファイバーおよび生検で潰瘍性大腸炎と診断された. 術後 11 年, 反復増悪する炎症のため, 回腸直腸結腸切除術が施行された. 直腸を含む左側結腸に, 連続性にハウストラの消失, 粘膜萎縮があり, 組織学的に著明な陰窩の消失, 歪曲を示す粘膜萎縮が左側結腸に一樣にみられ, 炎症は粘膜に局限していた. 潰瘍性大腸炎と診断された. 一方, 吻合部には非活動性 Crohn 病の所見を認めた.

かつて, 幾つかの報告が, Crohn 病と潰瘍性大腸炎は同じ疾病で単に症状が異なるだけであると指摘していたが, 最近 20 年間に信頼できる

病理学的基準が確立され, 両者は異なる疾病単位であると考えられるようになってきた. 著者らの症例は臨床的データが整い, 確立された病理学的診断基準に合う Crohn 病と潰瘍性大腸炎の合併例である. fulminant colitis では, ときに全層性炎症や深い潰瘍がみられ, Crohn 病の合併と報告される場合があるが, 最近ではこのような症例は colitis indeterminate として扱い, いずれにも分類しない傾向にある. 診断基準を厳密にすると本当の両者の合併は非常に少ないと思われ, 著者らの症例は非常に興味深い. 両者の関係については, 病因論に対する答えが出てから, 明らかになると指摘している.

(愛知県がんセンター第 1 内科

松浦 昭 抄)